

# 国際政治理論における認識と方法

——ケネス・N・ウォルツを事例として——

南山 淳

## はじめに

現在国際政治学の大きな潮流のひとつは「ポスト実証主義」といわれる理論状況にある。それは理想主義・現実主義・科学主義を問わず、これまでの国際政治理論が依拠してきた認識論的 (epistemology)・方法的 (methodology) 枠組みを問い直す作業である。かつて「大論争 (Great Debate)」を展開してきた理想主義対現実主義、伝統主義対科学主義という対立軸はもはや過去のものとなりつつあるとい<sup>1</sup>つてよい。新現実主義や新自由制度主義という合理主義理論 (rational theory) であれ、批判理論<sup>2</sup>、フェミニズム国際理論、ポスト構造主義等の内省的理論 (reflective theory) であれ、対立軸を形成するのは細分化された存在論と認識論および、その

コロラリーとしての方法論の問題であり、ここでは行動科学的国際政治理論に典型的に見られた素朴な主客二元論は影を潜め、理論と現実の関係に対して何らかの解答を前提とした上で理論構築を図らなければならないという点で共通の認識が形成され<sup>3</sup>つつある。

したがって、ポスト実証主義の国際政治理論 (ポスト冷戦の国際政治理論と言い換えてもよい) 研究のために、まず必要な予備作業は個々の国際政治理論がいかなる認識論的・方法論的前提に基づいて成立しているのかについて詳細に検討を加えていくことである。こうした観点から、まず国際政治学における最も強力な理論家の一人であるケネス・ウォルツ (Kenneth N. Waltz) の新現実主義理論を取り上げ、再検討することが本稿の目的である。<sup>4</sup>

## 1. 伝統的現実主義批判

新現実主義を伝統的現実主義と比較した場合、何をもちつて「新しい」といえるのか。国際政治の基本的な特徴はアナキーであるとする点、最も主要なアクターは国民国家であるとする点、あるいは国家は常に自己の力の最大化を図ることを目的として行動するとしている点で、二つの理論が仮定する世界に大きな違いはない。その意味で双方とも紛れもない現実主義の理論である。しかしながら、方法論の点で新旧二つの理論の間には明らかな断絶が存在する。このことは新現実主義の伝統的現実主義批判を検証することによって明確になる。

ウォルツが厳しく批判したのが、伝統的現実主義（および、ほとんどの国際政治理論）に共通する方法論である還元主義（reductionist approach）の問題である。還元主義とは、一言でいえば、全体のなかに占める特定部分（parts）の属性および相互作用を研究することによって、所与のシステム全体を理解しようとする研究方法の総称である。国際政治学の場合、国際関係の全体像を、国家あるいはそれ以下のレベルにおける政治的・経済的・社会的・心理的要因によって、説明しようとする立場が、これにあたる。伝統的現実主義に

おいては、（モーゲンソーに典型的に見られるように）国際政治のあらゆる事象の説明は、最終的には「万人の万人に対する闘争」というホッブズの人間観・自然状態観に還元される。つまり、「国際政治の本質はアナキーな世界において展開される権力闘争にあり、その根源的な原因は人間が普遍的に持つ権力欲（*just for power*）に求めることができる」という観点から、国際システム全体の帰納的説明を試みるのである。その意味で方法的個人主義（*methodological individualism*）の理論ともいうことができよう。

しかしながら、このような理論構造を前提とする限り、個人の行為、国家の対外行動、国際システムという「国際関係の三つのイメージ」の位層は、個人あるいは（そのアナロジーとしての）国家間の関係に解消されてしまい、三者間の相互関係は曖昧なまま棚上げされることになり、結果として、国際システム全体の把握は不可能になる。なぜなら、帰納法の目的は事象間の相互関係を記述することであり、因果関係の生起そのものは説明の対象外となるからである。換言すれば、いかに膨大なデータを集積したとしても、それは単なる帰納命題の集積に過ぎず、システムの全体性を因果的に説明することはできないのである。したがって、「科学的な」国際政治の一般理論を構築するためには、演繹的な論理に基づいて経験的事実の因果性を説明する理論の構築が不可欠というこ

とになる。ほとんどの国際政治理論が還元主義と帰納主義というこの方法論上の誤謬を免れていないというのが、ウォルツの現状認識であった。

## 2. 新現実主義の理論構造

まず、ウォルツの新現実主義理論における認識論を整理しておこう。国際政治は個人、国家、国際システムという三つの位層によって構成されている。政策決定者および国家の対外行動は歴史の具体的局面によって、その都度変化するものであり、それを一義的に確定することはできない。一方、国際システムの属性は相対的に安定した持続性を有している。

還元主義の立場に立つ国際政治理論は、主に国家という構成単位の視点から、国際システムの把握を試みるが、政策決定者や国家の対外行動は、固有の不安定性を有しているがゆえに、システム・レヴェルの現象を正確かつ安定的に説明するには不適切である。したがって、システム・レヴェルの分析を通じて、国際システムの構造がその構成単位である国家にいかなる影響を与えているかを明確化することが必要となる。

以上の点を踏まえ、ウォルツは「科学的な」国際政治理論を構築するために、システム・アプローチ (systemic

approaches) と構造主義 (structuralism) という二つの方法を導入する。カプラン (Morton A. Kaplan) に見られるように、これまでもシステム・アプローチをとる国際政治理論は少なからず存在していたが、いわゆる国際システム論はシステムを構成単位の属性と構成単位の相互作用過程に還元してしまつたため、単なる国際システムの記述に終始してしまつている。しかしながら、これではシステムの構成単位と構造の峻別ができず、例えば、近代以降の国際システムの変容と国家の対外行動の変化の因果関係を説明することはできなくなる。したがって、構成単位レヴェルと構造レヴェルの峻別することが理論上の至上命題となる。

新現実主義は演繹論理に基づいた高度に抽象的な一般理論を志向しているが、そこで駆使される諸概念は決して普遍言明ではなく、あくまでも特定の研究者の提示する仮説・命題群に過ぎない。この方法が現代思想における構造主義に起源を持つことは明らかであろう。ここでいう「構造」とは、客観主義的認識論に基づいて、ア・プリオリな形式(演繹体系)として認識される「相対的に不変の諸要素」および要素間の諸関係によって構成される認識の枠組みである。この構造を認識論的な基盤として「置換可能性 (possible permutations)」を有する要素の把握を試みる、というのが構造主義の基本的な考え方である。この構造主義の方法論が既述した構成単位

レヴェルと構造レヴェルの峻別につながることはいうまでもないだろう。<sup>(16)</sup> 理論の靜態性に対する批判が両者に共通している点も、それを物語っている。

では、システム・アプローチと構造主義という方法を導入することによって、新現実主義はいかなる論理構成をとることになるのか。それを明らかにするためには、新現実主義における、システム、構造 (structure)、構成単位 (unit) という主要概念を理解しなければならぬ。ウォルツによれば、構造および相互に作用している構成単位から構成されるのがシステムであり、システムを全体として理解することを可能にするシステム大の構成要素が構造である。そして構成単位とは諸部分の配置によって定義される抽象形態である。<sup>(17)</sup> これらの概念を通じて国際関係はいかに説明されるのだろうか。

国際システムを構成する基本単位は、国家および国家間の相互関係である。しかし、これだけでは最終的に構成単位の属性とその相互作用過程に説明が還元されてしまい、(従来)の国際システム論同様) 完全には「還元主義の誤謬」を脱することはできない。政策決定者のパソナリティ、国家体制、外交、通商関係、戦争等が、構成単位の属性および相互作用過程の具体的な内容であり、これらは構成単位レヴェルの問題である。一方、これらの変動要因が国際システムのなかで、どの様に配置されるのか、という問題はシステム・レヴェル

の問題であり、国家単位レヴェルでの説明は不可能である。<sup>(18)</sup> そこで「構造」という概念が極めて重要な意味を持つことになる。つまり、国際システム内における構成単位の配列の変化を確定するために使用される固定的な認識の枠組みが構造であり、したがって、構成単位の配列の変化と構造の変化の間には完全な相関関係が成立することになる。<sup>(19)</sup>

国際システム構造の最も重要な与件は、優越する権力が存在しないという意味でのアナキーであり、構成単位である国家の活動は、その構造の特性上、自助 (self-help) という秩序原理によって規定されることになる。つまり、構成単位 (国家) の行動は国際システムにおけるアナキー構造によって一義的に決定されるのであって、それは個々の国家の属性 (意思) とは無関係なものである。ゆえに、還元主義は<sup>(20)</sup> 国際政治理論の方法としては不適切なものということになる。もちろん、個人あるいは国家レヴェルの分析が不可欠であるということは否定されるものではないが、それはあくまでも国際システムとは異なった分析レヴェルの問題 (levels of analysis problem) として処理されるべきだというのが、ウォルツの主張である。<sup>(21)</sup>

以上のことから、新現実主義における力の概念が、古典的現実主義におけるそれとは異なっていることが明らかになる。ウォルツは古典的現実主義における「パワー至上主義」

を方法論的個人主義に基づく還元主義であると批判し、力を他の構成単位（国家）の「能力（capabilities）」との比較を通じて評価される関係概念として規定する。能力とは、関係概念としての力を補助するために設定された（相対的な意味での）下位的実体概念であり、具体的には、軍事力、経済力、領土、人口、政治的安定度等を指す。つまり、アナキーな国際構造において力を関係概念として定義する場合、それは国際システムのアナキー構造が構成単位間の配列を決定する際の指標に過ぎず、国家の属性としての能力を、力とは別に規定しておくことが必要になるのである。また、能力配置の変化は、それが国際構造の変化に資する限りにおいて意味を持つという観点から、現実の国際システムの構成単位は大国に限定されることになる。

さて、アナキーな国際構造がア・プリアリな理論的前提を構成している以上、実際には、国際システムにおける能力配分が国際関係を決定することになる。ミクロ経済学においては、市場の構造を決定するのは、独占・寡占・自由競争といった企業形態であり、同様に、国際構造を決定するのは国家の配置形態である。新現実主義モデルにおけるアクターが基本的に大国に限定されることを考慮すれば、具体的には、二極構造か多極構造かという点が問題になる。多極構造の場合、（近代ヨーロッパ国際政治史に見られるように）国家間

関係が複雑化するため、政策決定者の意図や国家の対外行動の結果に常に不確実性がつきまとうことになり、誤算から戦争を誘発する危険性が増大することになる。これに対し、二極構造の場合、対立図式は単純かつ安定的である。そこでは、安全保障上の利益は相対的に明確であり、相手の行動に付随する不確実性も縮減され、誤算による戦争の可能性は最小限のものとなる。二極構造によつて国家間の利害関係が明確化したために、冷戦はイデオロギー闘争から明確な相対利益をめぐる権力政治へとその比重を移行させた。激しい冷戦のレトリックとは裏腹に、決定的な局面においては米ソは意外に慎重に行動したと、ウォルツはいう。

### 3. 新現実主義理論の問題点

新現実主義の問題点は、その方法論に付随する現状維持志向、即ち理論的静態性に集約される。新現実主義の方法論上の支柱であるシステム・アプローチと構造主義は共にその静態的な方法論を批判されてきたが、前者が要素間関係の明示を、後者が客観的（固定的）な理論認識を目的としている以上、その批判は必然的なものといえる。しかしながら、新現実主義におけるこれらの理論的特質は別の極めて深刻な問題を提起することになる。国際システムの構成単位としての国

家とアナーキーな国際構造は、新現実主義のア・プリアリオリな与件であり、その他のあらゆる要素は全て過程レヴュエルに還元されてしまい、例えば核兵器の出現や国際的相互依存の深化といった現象と国際システムの関係は説明から捨象されることになる。また、あらゆる国家の属性は基本的に同一であると仮定するため、第三世界における民族紛争等の内政要因が国家体制に与える影響は、それが国際構造に多大な影響を与えるものであったとしても、分析レヴュエルの違いを理由として、理論の枠外に置かれることになる。つまり、アナーキーな国際構造と合理的アクターとしての国家というホップズの政治思想と近代ヨーロッパの国際政治史から抽出された理念型が理論の「中核帯」を構成しているため、それに反する全ての事象は理論の中枢から排除されることになり、その結果、例えばソ連邦の崩壊が国際システムに与える影響を理論的に説明することは不可能になるのである。

以上の問題のコララー<sup>(註)</sup>として、新現実主義理論は国際システムの変動局面を説明することができないということが明らかになる。コックス (Robert W. Cox) によれば、アメリカの国際政治学に共通する一つの特徴は、所与の認識枠組みのなかで問題を論理的に操作することによって処理しようとする「問題解決理論 (problem-solving theory)」のそれである。アナーキーな国際構造という所与の枠組みのなかで国家とい

う構成単位の論理的操作によって、国際システムの説明を試みるという点で、新現実主義が典型的な問題解決理論であるということとは、コックスの指摘を待たずともないだろう。問題解決理論は固定的な枠組み内での概念操作によって問題を処理するという点で優れているが、他方構造そのものの変動に対する説明能力は極めて貧弱である。新現実主義を含むほとんどの国際政治理論が冷戦構造の崩壊を予測できなかった一つの要因はここにある。冷戦終焉後、新現実主義の立場をとるミアシャイマー (John J. Mearsheimer) が冷戦期を「長い平和」(ギャデイス) の時代として郷愁をもって語った背景には、固定的な認識枠組みを喪失した問題解決理論としての新現実主義の苦悩があったといえる。コックスは、所与の支配的秩序から距離を置き、その歴史過程の起源を問う「批判理論 (critical theory)」を重視することを主張するのであるが、ウォルト<sup>(註)</sup>は科学的国際政治理論擁護の立場から、それを拒絶している。

### おわりに

「人間の原罪」に理論的根拠を求める伝統的現実主義と比較して、新現実主義は方法的集団主義、演繹論理、システム・アプローチ、構造主義等、極めて高度な方法論を駆使し

科学的な一般理論を志向したという点で、国際政治理論の発展に大きく貢献したと評価することができるが、その科学的な外観とは裏腹に、理論の中核帯には、アナキーの論理と国家中心主義という極めて古典的な価値が定位されている。これは普遍性をもった演繹的な国際政治理論を構築するためには、客観的で固定的な認識論に基づいた「研究プログラム (research programmes)」が必要不可欠であるという認識によるものと考えられる。

確かに、科学的な理論構築のための方法論という観点から見れば、それはある意味で妥当な選択である。しかし、ここで理論とは、本来現実に生起した(あるいは生起しつつある)現象を説明するための道具であるということを改めて認識する必要がある。戦後国際政治が、一方でアナキーの論理と国家中心主義の動揺の歴史であったこともまた事実である。特に冷戦後の現在、国内要因を無視して国際関係が成り立ち得ないことはなかなかに常識と化している。それにもかかわらず、国内要因を分析レヴェルの問題として切り捨て、あくまでも科学的な「国際政治の理論」に固執する新現実主義モデルは容易に抑圧のイデオロギーに転化する危険性を内在させている。なぜなら、ユーゴスラヴィア内戦に見られるように、第三世界においては国家体制そのものが支配の道具として機能する部分が少なくなく、そのような現実を無視して、あらゆ

る国家を国際システムの構成要素として一括して処理すれば、国際的な観点から国内問題を理論化する道を封殺してしまい、国内要因の国際システムへの影響を放置しておくことが合理化されてしまうことになるからである。必要なことは、たとえ科学性や普遍性のある程度犠牲にしたとしても、国家間の属性とその差異を国際・国内の両側面から実態に即して説明し、それを歴史的な文脈のなかで相關的に理論化していくことである。

(1) 国際政治学における「ポスト実証主義論争」については、以下を参照。

John A. Vasquez, "The Post-Positivist Debate," in Ken Booth and Steve Smith, eds., *International Relations Theory Today*, Polity Press, 1995, pp.217-240; Steve Smith, Ken Booth and Marysia Zaleski, eds., *International Theory*, Cambridge U.P., 1996.

合理主義理論における論争については、以下を参照。

David A. Baldwin, ed., *Neorealism and Neoliberalism*, Columbia U.P., 1993.

(2) 例えは、Andrew Linklater, *Beyond Realism and Marxism*, Macmillan, 1990.

(3) 例えは、J. Ann Tickner, *Gender in International Relations*, Columbia U.P., 1992; Christine Sylvester, *Feminist Theory and International Relations in a Postmodern Era*, Cambridge U.P., 1994.

(4) 例えは、James Der Derian and Michael J. Shapiro, eds., *In-*

- International/Intertextual Relations*. Lexington Books, 1989. R. B. J. Walker, *Inside / Outside*, Cambridge U.P., 1993.
- (5) Steve Smith, "Positivism and beyond." *Ibid.*, Smith, et al., pp.11-46.
- (6) もちろん、新現実主義の立場に立つ研究者はウォルトンに限らないうが、本稿においては、新現実主義理論とはウォルトンの「構造的現実主義理論」を指すこととする。ウォルトンの新現実主義理論に関しては膨大な研究が存在するが、差し当たり以下を参照。
- Robert O. Keohane, ed., *Neorealism and Its Critics*, Columbia U.P., 1986; Barry Buzan, Charles Jones and Richard Little, *The Logic of Anarchy*, Columbia U.P., 1993; Hans Mouritzen, "Kenneth Waltz : a critical rationalist between international politics and foreign policy", in Iver B. Newman and Ole Weaver, eds., *The Future of International Relations*, Routledge, 1997, pp.66-89 ; 神谷万丈「ネオ・リアリズム国際政治理論」〔防衛大学校紀要〕第六十五号、一〇二―二三頁。角南治彦「K・N・ウォルトンの国際構造論に関する一考察」〔『国際政治』一〇六号、五六―七〇頁〕。
- (7) Kenneth N. Waltz, "Reflections on Theory of International Politics." *Ibid.*, Keohane, pp.322-345.
- (8) Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics*, McGraw-Hill, 1979, pp.18-20.
- (9) *Ibid.*, ch. 4.
- (10) Kenneth N. Waltz, *Man, the State and War*, Columbia U.P., 1954.
- (11) *Ibid.*, Waltz, 1979, p.4.
- (12) *Ibid.*, pp.38-41.
- (13) Morton A. Kaplan, *System and Process in International Politics*, John Wiley, 1957.
- (14) *Ibid.*, Waltz, 1979, pp.50-59.
- (15) Richard K. Ashley, "The Poverty of Neorealism," *International Organization* 38, 2, Spring 1984, pp.225-286.
- 構造主義については、例えば以下を参照。  
C・レヴィ・ストロース(川田順造・他訳)『構造人類学』(みすず書房、一九七二年)。
- (16) *Ibid.*, Waltz, 1979, ch.5.
- (17) *Ibid.*, pp.79-81.
- (18) *Ibid.*, p.80.
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.*, pp.88-93.
- (21) *Ibid.*, Waltz, 1957, pp.237-238; 1986, pp.337-341.
- (22) *Ibid.*, Waltz, 1979, p.131.
- (23) *Ibid.*, pp.97-99.
- (24) *Ibid.*, pp.88-93.
- (25) *Ibid.*, pp.170-176.
- (26) 上の批判に関しては、John Gerard Ruggie, "Continuity and Transformation in the World Polity." *Ibid.*, Keohane, pp.131-157.
- (27) ホッブズの政治思想と国際政治理論の関係については、以下を参照。  
進藤榮一「権力政治モデル」(筑波大学大学院社会科学研究所『社会科学の新しいパラダイム』一九九六年、一七三―一八四)



頁)。

- (28) *Ibid.*, Ruggie.
- (29) Robert W. Cox, "Social Forces, States and World Orders," *Ibid.*, Keohane, pp.204-254.
- (30) John J. Mearsheimer, "Why We will soon miss the Cold War," *The Atlantic*, vol. 266, no. 2, August 1990, pp.35-50.
- (31) Waltz, 1986, pp.337-345.
- (32) Robert O. Keohane, "Theory of World Politics," *Ibid.*, Keohane, pp.163-170.
- 方法論として「科学プログラム」に立つたその文脈を参照。Imre Lakatos, *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Cambridge U.P., 1978.
- (33) 国際政治理論における「分析レベル問題」に関して、以下を参照。
- Barry Buzan, "The Level of Analysis Problem in International Relations Reconsidered," *Ibid.*, Booth and Smith, pp.198-216;
- Robert Latham, "Getting Out from Under," *Millennium*, vol. 25, no. 1., 1996, pp.77-108.
- (34) Mohamed Ayoub, "State Making, State Breaking, and State Failure," in Chester A. Crocker and Fen Osler Hampson with Pamela Aall, eds., *Managing Global Chaos*, United States Institute of Peace Press, 1996, pp.37-51.